

『こころ』先生の眼鏡

Junko Higasa 2015.6.14

先生の眼鏡には「疑念」というレンズがはまっていた。鎌倉で眼鏡をはずして素に戻って海に入った先生は、眼鏡を拾って手渡した「私」をレンズ越しに見た。いわば「私」は新たな疑念の対象である。

そして東京へ帰り、雑司ヶ谷墓地で「私」が先生に出し抜けに声をかけた距離は「眼鏡の縁が日に光るまで近く寄った」即ち「過去を探りに来たのではないか」という疑念が光るまで近寄った」距離である。先生はしばらく「私」をそのレンズ越しに眺めた。

先生は下宿をした学生時代にはすでに近眼であった。それは叔父に騙されてからかけた「疑念」の眼鏡かどうか定かではないが、少なくとも奥さん、御嬢さんをその眼鏡で眺めていたことは事実である。そして「恋」という眩しい光りによって視力が低下したにもかかわらず、度の合わなくなった眼鏡のまま対象を見ようとして見えず、ついに幼い頃に裸眼で見えていたKまで歪んで見え出した。

光りを屈折させて物を見えるようにさせるレンズは、矯正が必要でない素直な心の眼に不要な屈折した光を届け続けてきた。それにより先生は、実像ではなく反射する虚像を真実と誤認するに至った。

そして「私」を近くで見るうちに、少し見え方が違うことに気付いて「疑念レンズ」を「信頼レンズ」に交換しようと思った。しかし遠くの「私」を眺めた時に、新たなレンズはもう不要であると悟った。